

「九遍知」の一考察

周 柔 含

1. 問題の所在 異生は断惑することができるのか、また聖者も異生と同様に有漏道によって断惑することができるのかという問題について、部派によって見解が異なる¹⁾。それらの説の中で、ただ有部だけが異生は煩惱を断じることができると主張している。有部は煩惱の束縛を離れた段階に「遍知」(parijñā, 完全盡知)を立てている。ただし、有漏道によって断惑する場合、異生は遍知を立てることができないが、聖者は二種遍知を成就することができる。果たして、異生は断惑することができるのであろうか。もし、できないならば、それは異生が断惑することができるという有部の自説と矛盾することになる。一方、もしできるならば、同じ有漏道によって断惑するにもかかわらず、なぜ異生は遍知を立てることができず、聖者はできるのであろうか。そして、遍知の成立条件において、『大毘婆沙論』は『俱舍論』により「離俱繫」(ubhaya-samyoga-viyoga)という縁を加えているのである。世親はその条件を立てる必要はないと主張する(T29, 113a13-14)が、衆賢は必要であると主張している(T29, 656b15-23)。なぜ、毘婆沙師は「離俱繫」という条件を立てなければならないのであろうか。また、見道所断の煩惱の断における六遍知は、「智忍」によって三界の見惑を断じるから「忍果」であり、「智果」ではないのに、なぜ遍知と名づけるのであろう。本稿は遍知の成立について、有部の断惑理論に基づいて検討するものである。

2. 遍知 (parijñā) 有部は真理を完全に知り尽くし、煩惱の束縛を離れ、「擇滅」(pratisamkhyā-nirodha)を獲得する段階に「遍知」を立てている。遍知は「智遍知」(jñāna-parijñā)と「断遍知」(prahāṇa-parijñā)である。『婆沙論』において、ある人は無漏智こそが智遍知であると主張し、ある人は普遍の価値に基づいて、有漏智も無漏智も智遍知であると主張する(T27, 175a15-b9; 931b25-28)。一方、『俱舍論』には「智遍知者、謂無漏智」とある(T29, 112a18)。しかし、毘婆沙師がそれを決決していないから、有部は有漏智も智遍知であることを認めていることが分かる。では、如何なる有漏智が智遍知と名づけられるのか。有部教学では真實作義のみ

(158)

「九遍知」の一考察（周）

によって断惑することができる。それゆえ、勝解作意 (adhimukti-manaskāra) に相応する以外の聞・思・修所成慧は、諸法の自相共相を観ずることができ、また如実に縁起を観ずる有漏智でも、現観と名づけることができるため、「智遍知」と名づけるのである (T27, 175a25-b8)。ところが、『順正理論』には「唯無漏慧為智遍知, 是我宗中正意所許」とある (T29, 654a19)。それにもかかわらず、衆賢は「於一法未達等者, 依於此法, 若未遍知, 障苦盡者, 密説無過」といっている (T29, 654a25-26)。換言すれば、有部は有漏智も智遍知であることを許していることが分かる。次に、断遍知とは〔煩惱を〕断ずることである。『順正理論』には「断遍知者, 体即離繫」とある (T29, 654a27)。それは、智遍知を因として、煩惱の束縛を離れ、例えば貪・瞋・癡を断ずることが断遍知である (T27, 175b8-9)。しかし、断には所縁がなく、また遍知の作用もないのに、どうして遍知といえるのか。実際には〔煩惱を〕断ずることは、択滅であり、遍知ではなく、遍知の「果」である。この結「果」(断)を仮に「因」(正智, 智遍知)と名付けて遍知というのである。

3. 九遍知 有部は三界の断遍知に九遍知を立てる。三界九地の煩惱は八十九品であるのに、何故九遍知しかないのであろうか。遍知を立てるとするのはそれぞれの煩惱の断に一つ一つの遍知を立てるのではなく、またすべての煩惱を断じた後に、まとめて一つの遍知を立てるのではなく、煩惱は再び生じないという条件に基づいて遍知と名づけるのである (T29, 656a11-15)。なぜなら、「三世実有」を宗としている有部にとって、煩惱は永遠に消えることはない。それでは、如何なる条件を具足すれば、煩惱が再び起こらず、遍知と名づけられるのか。断惑にはいろいろな要因を考えなければならない。総合すれば、三縁か四縁によって九遍知を立てる。見道所断の煩惱の断に、三縁即ち (1) 無漏の離繫得を得る、(2) 有頂惑を断ずる、(3) 滅雙因 (ubhaya-hetu-samudghāta) によって、六遍知を立てるのである。その他、三界の修所断の煩惱の断に、上述の三縁に「越界」(dhātum samatikrāmah)を加えて、四縁によって三遍知を立てる (T29, 112c22-113a10)。しかし、この修惑の断における三遍知は異生の身に成立することができない。なぜなら、異生にとって、滅雙因 (表 A 10, 13) を成就することができるものの、それは有漏慧であるから、無漏の離繫得を得ることができない。同様にそれは有漏道によるので、有頂地の煩惱を断ずることができないため、遍知と名づけることができないのである (T29, 113a1-3)。それにもかかわらず、なぜ有部は異生は断惑することができるかと主張しているのか。後節で検討する。ところが、遍知を立てる条件

について、『婆沙論』は『俱舍論』により離俱繫という縁を加えている。ここで、『婆沙論』（T27, 322b13-324a20）における断惑の五縁と遍知との関わりを下表 A にまとめる。

(1) 滅 雙 因	(2) 離 俱 繫	(3) 無 漏 繫	(4) 缺 有 頂	(5) 永 度 界	断惑と遍知との関わり	遍知 を 成 立
					左 (1)-(5) は右の内容に対応する	
×	×	●	×		1 苦法智忍滅, 苦法智生時, (1) 未滅雙因, 雖滅見苦所断因, 未滅見集所断因故; (2) 未離俱繫, 雖離見苦所断繫, 未離見集所断繫故; (3) 唯得無漏離繫得, (4) 未缺有頂諸遍行; 雖有一縁闕三縁故, 彼所得断未名遍知。	
×	×	●	●		2 苦類智忍滅, 苦類智生時, (1) 未滅雙因, 雖滅見苦所断因, 未滅見集所断因故; (2) 未離俱繫, 雖離見苦所断繫, 未離見集所断繫故; (3) 然得無漏離繫得, (4) 及缺有頂諸遍行; 雖有二縁闕二縁故, 彼所得断未名遍知。	
●	●	●	●		3 集法智忍滅, 集法智生時, (1) 名滅雙因, 先滅見苦所断因, 今滅見集所断因故; (2) 亦離俱繫, 先離見苦所断繫, 今離見 (322c) 集所断繫故; (3) 既得無漏離繫得, (4) 及缺有頂諸遍行; 具四縁故, 彼所得及前断名第一遍知。	○
●	●	●	●		4 集類智忍滅, 集類智生時, (1) 名滅雙因, 先滅見苦所断因, 今滅見集所断因故; (2) 亦離俱繫, 先離見苦所断繫, 今離見集所断繫故; (3) 既得無漏離繫得, (4) 及缺有頂諸遍行; 具四縁故, 彼所得及前断名第二遍知。	○
●	●	●	●		5 滅法智忍滅, 滅法智生時, (1) 名滅雙因, 先滅見苦集所断因, 今滅見滅所断因故; (2) 亦離俱繫, 先離見苦集所断繫, 今離見滅所断繫故; (3) 既得無漏離繫得, (4) 及缺有頂諸遍行; 具四縁故, 彼所得断名第三遍知。	○
●	●	●	●		6 滅類智忍滅, 滅類智生時, (1) 名滅雙因, 先滅見苦集所断因, 今滅見滅所断因故; (2) 亦離俱繫, 先離見苦集所断繫, 今離見滅所断繫故; (3) 既得無漏離繫得, (4) 及缺有頂諸遍行; 具四縁故, 彼所得断名第四遍知。	○
●	●	●	●		7 道法智忍滅, 道法智生時, (1) 名滅雙因, 先滅見苦集所断因, 今滅見道所断因故; (2) 亦離俱繫, 先離見苦集所断繫, 今離見道所断繫故; (3) 既得無漏離繫得, (4) 及缺有頂諸遍行; 具四縁故, 彼所得断名第五遍知。	○
●	●	●	●		8 道類智忍滅, 道類智生時, (1) 名滅雙因, 先滅見苦集所断因, 今滅見道所断因故; (2) 亦離俱繫, 先離見苦集所断繫, 今離見道所断繫故; (3) 既得無漏離繫得, (4) 及缺有頂諸遍行; 具四縁故, 彼所得断名第六遍知。	○

(160)

「九遍知」の一考察（周）

×	×	●	●	×	9 離欲界修所断一品乃至八品染時，(1) 未滅雙因，雖滅一品乃至八品因，未滅八品乃至 (323a) 一品因故；(2) 亦未離俱繫，雖離一品乃至八品繫，未離八品乃至一品繫故；(3) 雖得無漏離繫得，(4) 及缺有頂諸遍行，(5) 而未永度界；雖有二緣闕三緣故，彼所得断，未名遍知。	
●	●	●	●	●	10 離彼第九品染，無間道滅，解脫道生時，(1) 名滅雙因，先滅八品因今滅第九品因故；(2) 亦離俱繫，先離八品繫，今離第九品繫故；(3) 既得無漏離繫得，(4) 及缺有頂諸遍行，(5) 并永度欲界；具五緣故，彼所得及前断名第七遍知，謂五順下分結為盡遍知。	○
×	×	●	●	×	11 離四靜慮修所断各一品乃至八品染時，(1) 未滅雙因，雖滅一品乃至八品因，未滅八品乃至一品因故；(2) 未離俱繫，雖離一品乃至八品繫，未離八品乃至一品繫故；(3) 雖得無漏離繫得，(4) 及缺有頂諸遍行，(5) 而未永度界；雖有二緣闕三緣故，彼所得断未名遍知。	
●	●	●	●	×	12 離前三靜慮修所断各第九品染，無間道滅，解脫道生時，(1) 名滅雙因，先滅八品因，今滅第九品因故；(2) 亦離俱繫，先離八品繫，今離第九品繫故；(3) 雖得無漏離繫得，(4) 及缺有頂諸遍行，(5) 而未永度界；雖有四緣闕一緣故，彼所得断未名遍知。	
●	●	●	●	●	13 離第四靜慮修所断第九品染，無間道滅解脫道生時，(1) 名滅雙因，先滅八品因，今滅第九品因故；(2) 亦離俱繫，先離八品繫，今離第九品繫故；(3) 既得無漏離繫得，(4) 及缺有頂諸遍行，(5) 并永度色界；具五緣故，彼所得及前断名第八遍知，謂色愛盡遍知。	○
×	×	●	●	×	14 離四無色修所断各一品乃至八品染時，(1) 未滅雙因，雖滅一品乃至八品因，未滅八 (323b) 品乃至一品因故；(2) 亦未離俱繫，雖離一品乃至八品繫，未離八品乃至一品繫故；(3) 雖得無漏離繫得，(4) 及缺有頂諸遍行，(5) 而未永度界；雖有二緣闕三緣故，彼所得断未名遍知。	
●	●	●	●	×	15 離前三無色修所断各第九品染，無間道滅解脫道生時，(1) 名滅雙因，先滅八品因，今滅第九品因故；(2) 亦離俱繫，先離八品繫，今離第九品繫故；(3) 雖得無漏離繫得，(4) 及缺有頂諸遍行，(5) 而未永度界；雖有四緣闕一緣故，彼所得断未名遍知。	
●	●	●	●	●	16 離非想非非想處修所断第九品染，金剛喻定滅初盡智生時，(1) 名滅雙因，先滅八品因，今滅第九品因故；(2) 亦離俱繫，先離八品繫今離第九品繫故；(3) 既得無漏離繫得，(4) 及缺有頂諸遍行，(5) 并永度無色界；具五緣故，彼所得及前断名第九遍知，謂一切結盡遍知。	○

表 A 五緣と遍知の安立 (× 条件不成立；● 条件成立；○ 遍知を成立)

世親は「それ(離俱繫)と滅雙因と越界との違いはないから，〔第五条件(離俱繫)〕

を立てることはできない」という意見を示している (T29, 113a10-17). 表 A で九遍知を成就する三縁「離俱繫」(3-8, 10, 13, 16)・「滅雙因」(3-8, 10, 13, 16)・「越界」(10, 13, 16)の結果から、滅雙因を成就するものは、必ず離俱繫を成就する。また離俱繫を成就するものなら、必ず滅雙因を成就する。それゆえ、とりわけ離俱繫という条件を作り上げる必要はないようである。

なぜ、論主は第五縁を立てないのか。称友は次のように理解している。見苦所断〔惑〕が断ぜられても、それを所縁とする見集所断の遍行因が断ぜられていない限り、滅雙因を根絶していない。また修所断〔惑〕においても、八品に至るまでが断ぜられたが、第九品はまだ断ぜられていないならば、界を超えることはないからである。それゆえに、我々はそれ以上に〔第五の条件〕を説かない (AKVy, 509, 6-10)。世親の見解について、衆賢は次のような意見を示している (T29, 656b15-23)。

滅雙因と離俱繫とは同じものを所縁としているが、因と繫との意味は同じではない。因とは五部煩惱において起こらせる作用であり、繫とは煩惱を束縛する作用である。〔ここでの離俱繫とは所縁と能縁との束縛を離れたことである (AKVy, 508, 30-32)〕。例えば、苦類智が生ずる際に、苦諦の能縁煩惱はすでに断じたが、集法智はまだ生じていないならば、二部はお互いに起こらせる力がないものの、相互に因とする性質がある。そこで、見苦所断〔惑〕には縛る作用がなく、見集所断惑の縛る作用はもとのままである。それゆえ、滅雙因すなわち離俱繫になるのではない。

また、無漏縁惑は有漏縁惑を繫がせることがないので、因イコール繫の作用とはいえない。それゆえ、我宗はその二つの条件を立てるのである。今、それを説かない場合、ただ「此れ離俱繫を説けば、滅雙因は自然にそれと異なるものとして成立するからである」というべきである。

つまり、離俱繫という条件を成就していない限り、能縁煩惱は完全に所縁煩惱を離れていない。またそれを所縁としている他部遍行惑に繫縛しているから、煩惱を起こらせる可能性があるのである。それゆえ、滅雙因と離俱繫とは同じ働きではないから、有部は二種の縁を立てるべきと主張している。

4. 「自性断」と「所縁断」 有部教学では、断惑の性質によって、自性断 (svabhāva-prahāṇa) と所縁断 (ālambana-prahāṇa) に分ける。煩惱そのものの対治道が生じ、煩惱自体を再び起こらないように断じることを自性断という。一方、煩惱は有漏法のように他の煩惱の対象となることによって、その煩惱に縛られているものが、そのもの自体を断じるのではなく、それを縛る煩惱を断じ、解放することを所縁断というのである (T29, 362c27-363a2)。断惑において、世親は自性断と

(162)

「九遍知」の一考察（周）

主張し、衆賢は所縁断と主張している²⁾。世親は煩惱自体の断すなわち煩惱自体を束縛する「得」を断じるのであり、もしそれを所縁とする煩惱があるならば、その煩惱自体の「得」を断じるはずであるという (T29, 111b21-24)。換言すれば、滅雙因を成就すれば、必ず離俱繫をも成就するのであり、離俱繫という条件は成立する必要がなくなるのである。それに対して、衆賢は煩惱の能縁と所縁との関わりを考慮し、もし能縁煩惱が完全に所縁煩惱を離れていないならば、再び煩惱を起こらせる可能性がある。それゆえ、離俱繫という条件を立てる必要があると理解することができる。

5. 有漏道と遍知 ところで、同じ有漏道によって断惑するのに、なぜ聖者が二種遍知（「五順下分結尽遍知」と「色愛尽遍知」、以下「五下遍知」「色尽遍知」）を得ることができ (T29, 112c12-15)、異生はできないのであろうか。有漏道によって断惑する場合において、聖者は有漏の六行観を観ずるほかに、異生より四諦十六行相を観じるから (T27, 331a11-28)、有漏・無漏の離繫得を得ることができる (T29, 655c23-25)。しかしながら、二種の離繫得を同時に獲得するものではない。つまり、聖者は未来沙門果（不還果）を証する際に初めて「五順下分結尽遍知」と「色愛尽遍知」を成就するのであって、不還果を獲得する前に、有漏道によって煩惱を断じた場合、遍知を成就することができないのである (T29, 655b2-5)。要するに、有漏道によって断惑する場合に、異生だけではなく、聖者も同様にすぐ遍知を得ることはできないのである。

6. 離繫を重得する 見道所断の煩惱の断における六遍知は、「智忍」によって三界の見惑を断じるから、「忍果」であって、「智果」ではないのに、なぜ遍知と名づけるのであろうか。実際には、無論「智忍」あるいは「智」で煩惱を断ずる場合、聖者は欲界九品惑を離れ、無間道を滅する。解脱道が生じる時に、この前「智忍」によって成就した六遍知を捨て、「五順下分結尽遍知」を獲得し、色界第四静慮第九品惑を離れ、無間道を滅し、解脱道が生じる時に、「色愛尽遍知」を獲得する。最後に無色界有頂地第九品惑を離れ、金剛喻定 (vajropamā-samādhi) が滅し、尽智 (kṣaya-jñāna) が生じる際に、煩惱を残らずまとめて断じ (T27, 323b17-324a20)、この前に得た「五順下分結尽遍知」と「色愛尽遍知」を捨て、三界見・修所断の一味の離繫得——「一切結尽遍知」を得るのである (T27, 322a25-b4)。それゆえ、「忍果」も遍知と名づけることができる。しかし、なぜ尽智が生じる際に、既に得た遍知をまとめて断じる必要があるのであろうか。この前に断じた煩惱はまだ実断していないのであろうか。そうではない。既に断じた

煩惱は再び断じる理がないのである。AKBh (321, 16) では次のように説かれている。

〔煩惱の〕滅尽は一回のみである，〔しかし〕その離繫得は何回でもできる．〔即ち〕対治〔道〕の生起，〔聖〕果の獲得，機根の勝進（^按練根）〔の場合〕がある．(63)．

要するに，煩惱の対治道が生起，あるいは聖果を獲得，練根になる場合に再び離繫得を得ることができる．なぜなら，離繫得は「道」に包摂されるから，勝進道を獲得する場合に，前に得た道を捨てるのと同時に離繫得をも捨てられる．例えば，無学道を証した時に，以前有学道によって得た離繫得を捨て，無学道の離繫得を獲得するのである．それゆえ，離繫得を重得するのを許される理がある (T29, 652a17-22)．

7. まとめ 以上，断惑説にかかわる九遍知を考察してきた．有部は有漏智も智遍知であることを許しているため，断遍知は結「果」(断)において仮に「因」(正智)の名を付けて，遍知というのである．遍知を立てる条件について，世親は煩惱自体の断すなわち「自性断」という断惑観点に基づいて，離俱繫が必要ではないと主張している．衆賢は煩惱の能縁と所縁との関わりを考慮し，所縁断という断惑観点に基づいて，離俱繫が必要であると主張している．有漏道によって断惑する場合に，聖者はすぐ遍知を得るのではなく，未来において不還果を証する際に，初めて「五順下分結尽遍知」と「色愛尽遍知」を獲得するのである．煩惱の断は一回のみであって，再び断じる理がない．しかし，離繫得は「道」に包摂されるから，勝進道を獲得する場合に，前の道を捨てると同時に離繫得をも捨てられる．それゆえ，離繫得を重得するのを許される理がある．したがって，煩惱の断において，金剛喻定が滅し，尽智が生じる際に，まとめて煩惱を断じ，前に得た遍知を捨て，三界見・修所断の一味の離繫得——「一切結尽遍知」を得るのである．

1) 『婆沙論』(T27, 264c15-16; 264c18-19; 264b19-20; 311a13-14; 264b19; 264c16-17)．

2) 詳細は，周柔含 (2009) 「説一切有部の断惑理論」, 『法鼓佛教学報』, pp.1-45 を参照されたい．

Abhidharmakośabhāṣya of Vasubandhu (AKBh). Edited by P. Pradhan. Patna: K. P. Jayaswal Research Institute, 1967.

Sphuṭārthā-abhidharmakośavyākhyā (AKVy). Edited by U. Wogiwara. Tokyo: Sankibo, 1989.

〈キーワード〉 (九)遍知，有漏道断惑，離俱繫

(慈濟大学助理教授)